研　究　業　績

へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績（第８報）

富山県農村医学研究会　豊　田　文　一
金沢大学医療技術短期大学部　津　田　光　世

はじめに

私どもは過去９年間、同一地域、同一検査によりへき地学童の耳鼻咽喉科検診を継続してきた。この目的は専門的検診の機会のほとんどないへき地学童の保健の一助ともなりうると考えたからである。しかし10年前のへき地の様相は社会環境の変化によって昔日の面影も薄れ、都鄙の格差は漸次解消され、そこに発生する疾患も特殊性を失いつつある。例えば私どもの対象としている白萩東部小学校の児童数の推移を辿ってみると、その変貌の著しく、いわゆるへき地は消滅しつつある感が深い。これは表１に示す通りであり、今後の過疎化の経過を見守りたい。

さて私どもは、昭和52年度引き続き検診を行い、その成績を報告することとする。

検査成績

昭和52年５月、中新川郡上市町小学校６校、うち上市中央小学校はへき地農村の対照校として選んだことは例年の通りである。

検診学童は1,396名で、へき地農村学童 298名（21.3%）、市街地学童 1,098名（78.7%）であり、学童数の比率は前年度とほぼ同率である。（表２）

各学校別の疾患と比率は表示の如くである。上市中央小学校（表３）、柿沢小学校（表４）、大岩小学校（表５）、白萩東部小学校（表６）、白萩西部小学校（表７）、白萩南部小学校（表８）。

表１　白萩東部小学校過去10年間学童数の推移

昭　和	学童数
43	84
44	80
45	83
46	64
47	44
48	29
49	19
50	16
51	16
52	14

表２　学校別、学年別学童数（調査対象）

学校＼学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計	%
上市中央小学校	174	174	208	199	177	166	1,098	78.7
柿　沢小学校	21	23	19	26	22	22	133	9.5
大　岩小学校	5	8	7	4	11	3	38	2.7
白萩東部小学校	1	4	3	2	2	2	14	1.0
白萩西部小学校	17	12	16	11	14	9	79	5.7
白萩南部小学校	7	3	6	5	4	9	34	2.4
計							1,396	

表3　上市中央小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1				11			8	10	3	3	1		1	37	174
2				8			7	7	7	1	1		1	32	174
3			3	2			3	6	5		1			20	208
4				7				6	2					15	199
5			1	4			8	5	3					21	177
6			1	1			4	6	3					15	166
計			5	33			30	40	23	4	3		2	140	
%			0.5	3.0			2.7	3.6	2.1	0.4	0.3		0.2	12.8	1,098

表4　柿沢小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1				3			1	1						5	21
2				2				1						3	23
3				1			1	1						3	19
4				1					1					2	26
5							1							1	22
6							2							2	22
計				7			5	3	1					16	133
%				5.2			3.8	2.2	0.8					12.0	

表5　大岩小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性別鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1															5
2				1										1	8
3															7
4								1						1	4
5															11
6															3
計				1				1						1	38
%				2.6				2.6						5.2	

表6　白萩東部小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽喉炎	その他	罹患者数	人数
1				1										1	1
2															4
3															3
4															2
5							1							1	2
6															2
計				1			1							2	14
%				7.1			7.1							14.2	

表7　白萩西部小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1				1				1	2					4	17
2									1					1	12
3															16
4									1					1	11
5															14
6															9
計				1				1	4					6	79
%				1.3				1.3	5.0					7.6	

表8　白萩南部小学校

病名＼学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1					1									1	7
2					1									1	3
3															6
4															5
5					1			1						2	4
6															9
計					3			1						4	34
%					8.8			2.9						11.7	

総　　括

学童の耳鼻咽喉科疾患として学校検診の重点となるものは、難聴、鼻副鼻腔慢性炎症、および扁桃疾患（慢性扁桃炎、扁桃肥大、アデノイド）であることは、既に本報告で屢々述べた。今回もその点について述べてみたい。

先ず難聴は全学童の 0.4%であるが、へき地学童では検出されなかった。この 0.4%という数字は概ね全国の都市の値に近く、また昭和52年度高岡市学童の数値0.2%よりやや高いが、これは専門技術者により検査を行なわれていないので、差異がないとみてよい。しか

もかつて学童難聴の主な原因であった中耳炎は皆無であった。

鼻炎は市街地、へき地農村ではほぼ同率、慢性副鼻腔炎は市街地にやや多い傾向にあった。すなわち鼻炎は市街地で 3.0%、へき地農村では 3.3%、副鼻腔炎は市街地 2.7%、へき地農村 2.0%であり、鼻炎副鼻腔炎のを合した罹患率は市街地では 5.7%、へき地農村では 5.3%となる。試みに高岡市の場合、鼻炎 8.7%、副鼻腔炎 1.2%で両者合計 9.9%となる。鼻副鼻腔炎症は高岡市より遙かに低率となる。ただ慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎の鑑別は症候著明の場合は問題はないが、集団的の鼻腔検査だけでは判別しがたいことが多く、X線診断等によらねば正鵠を期しえない。

扁桃炎、扁桃肥大について従来は無造作に処理されていたきらいがある。扁桃の炎症は全身疾患とも関連性があり、学校検診でも正しい知識をもって取り扱われねばならない。扁桃炎は集団検診の場合、口蓋弓の帯状発赤、表面の凹凸、腺窩の栓子の存在、さらに既往歴によって診定する。しかし扁桃の大きさには無関係である。扁桃肥大とは単純な肥大で、表面平骨、色沢は淡赤色から蒼白色にまで及び、しかも物理的障害のあるものを考える。この単なる肥大は幼児期に多く、年令の上昇とともに縮少することが多い。私どもはこの標準に基づいて分別したものである。一般に種々の統計資料では、この両者の分明の明らかでないものも多く、専門医の検診により正確を期すべきである。私どもの検診成績では扁桃炎では市街地 2.1%、へき地農村 1.7%、扁桃肥大はそれぞれ 3.6%、1.7%で市街地の方がやや高率を示す。今高岡市の場合、扁桃炎、扁桃肥大合せて 3.7%で、上市町の場合の5.2%で、後者は高率である。しかし前年度の7.5%よりかなり低下している。

耳鼻咽喉科疾患の罹患率であるが、本年度は市街地12.8%、へき地農村 8.7%で、その平均は11.8%、これは昭和50年17.4%、51年15.6%の数値を逐年的減少を示していることは注目すべきことである。(表9)

表9　市街地、へき地別疾患別検査成績表

	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	アレルギー鼻炎	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
上市中央小学校			5	33			30	40	23	4	3		2	140	1,098
			0.5	3.0			2.7	3.6	2.1	0.4	0.3		0.2	12.8	
その他の小学校				10			6	5	5					26	298
				3.3			2.0	1.7	1.7					8.7	
合　　計			5	43			36	45	28	4	3		2	166	1,396
			0.4	3.0			2.6	3.2	2.0	0.3	0.2		0.1	11.8	

さて私どもは、鼻副鼻腔炎学童の鼻汁の好酸球の検索を実施している。その検出にはエオジノステン（トリヰ）を使用しているが、その判定方法は既に述べてあるので略する。

成績は第9表に示す通りであり、陽性率は市街地24.6%、へき地農村20.0%で、例年市街地学童は高率を示している。なお検診時、明らかに鼻アレルギーと認められるものは3名に過ぎなかったが、鼻汁の検索により、何らかのアレルギーの因子の存在を推測しうる。ことに例年市街地学童に陽性率の高いことは、環境因子の存在も否定しえない。(表10)

表10　鼻汁の分泌液中の好酸球検索成績

上市中央小学校	＋＋15 ＋ 2	17	24.6%
	± 4 −48	52	75.4%
その他の小学校	＋＋ 3 ＋ 1	4	20.0%
	± 4 −12	16	80.0%
合　　計	＋＋18 ＋ 3	21	23.6%
	± 8 −60	68	76.4%

む　す　び

私どもは前年に引き続き、中新川郡上市町を中心として、へき地農村学童の耳鼻咽喉科検診を実施した。

これをまとめると次の如くなる。

1)　被検診学童 297名、対照とした市街地学童 1,096名である。

2)　難聴は市街地学童 0.5%、へき地農村学童には見出しえなかった。

3)　鼻炎は市街地学童は 3.0%、へき地農村学童は2.3%、慢性副鼻腔炎はそれぞれ2.7%、2.0%であった。

4)　扁桃肥大、扁桃炎は市街地学童ではそれぞれ 3.6%、2.1%、へき地農村学童ではそれぞれ 1.7%、1.7%でへき地においてはかなり低率であった。

5)　罹患率は市街地学童12.8%、へき地農村学童 8.7%で逐年減少の一途を辿っている。

以上私どもは昭和52年度中新川郡上市町を中心とした、へき地学童の耳鼻咽喉科検診を行ない、その成績を記述したが、逐年的に各疾患とも減少の傾向にあり、これも社会環境とくに栄養の改善、さらに継続的検診による、疾患保有者に対する適切な指導も看過できないものと思う。従って今後も引き続き検診を行ない、その成果の向上を期待したい。

なおこの検診に対し、上市町ならびに上市厚生病院長越山健二博士の御協力をえたもので、こゝに謝意を表する。

引　用　文　献

豊田文一他：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績　第1報――第7報　富山県農村医学研究会雑誌　第1巻――第8巻、昭和45年――昭和52年